



観峰館
本館4階 秋季平常展示
しじつ でんしょう
史実と伝承

がくせい
— 学制公布 150年記念展 —



展示案内パンフレット



2022年**9**月**17**日(土)~**11**月**23**日(水祝)

*出品作品は、キャプション左下の番号順にご覧ください。

ごあいさつ

当館は、明治から昭和前期まで、およそ6000冊の教科書コレクションを所蔵しています。令和4年（2022）は、学校教育の基本制度である「学制」が公布されて150年の節目にあたります。そこで 当館では、それを記念する展覧会を開催することとなりました。

歴史上の事実（史実）と、その土地土地で受け継がれてきた事柄（伝承）は、



作品No.7 「聖徳太子伝暦」（寛永5年・1629）

時として異なる場合があります。伝承から生まれる「歴史」があることも事実ですが、史実に基づかなくては、「真」の歴史を学ぶことができません。しかし、時に伝承が史実として認識されることがあります。その認識には、「教育」

が大きく影響を及ぼし、時に誤った事実を史実として助長することさえあります。その間違いがなぜ起こったのか、そして正しい事実とは何か、本展はそのことを考える試みです。

展覧会では、江戸時代の歴史書と、学制公布以後の教科書、錦絵等^{にしきえ}を展示します。教科書を深読みする「マニアック」な視点もあわせて、お楽しみください。

歴史教科書の中の聖徳太子



作品No.22「小学内国史 甲種（巻一）」
（明治34年（1901）訂正再版）

聖徳太子こと厩戸皇子（574～622）は、日本古代史上、最も著名な人物のひとりです。現在もお、人びとに親しみをもたれているこの皇子は、学制公布期の歴史教科書の中で、その事績について多く言及されてきました。

しかしながら、江戸時代に遡ると、仏教興隆の立役者として、仏教関係の書物の中で高く評価されつつも、こと歴史書になると、太子への批判

がしばしば見られます。「国史略」や「日本政記」

のような歴史書には、蘇我馬子との関係について、崇峻天皇暗殺事件の際の太子の対応に対し、批判がされています。

その批判を継承した教科書もいくつか出版されましたが、明治20年代になると、なぜか崇峻天皇に拘る記述が省略され、その中心は推古天皇即位後、厩戸皇子が皇太子となって以降の史実の抽出に特化されていきます。そして、幼時からの聡明ぶりなどを取り上げた記述が増えていき、「聖徳太子」という章立ての出現とともに、太子を美化する内容が人びとに享受されるようになりました。

その転換の理由については、定かではありませんが、明治21年の帝国憲法、

同 23 年の^{きょういくちよくご}教育勅語といった、皇室への忠義を助長する「動き」が影響を与えていることは否めないでしょう。

教科書に描かれた太子の肖像画

太子の肖像画といえ、旧一万円札に描かれた肖像画を思い起こす人もいるのではないのでしょうか。現在も教科書にも掲載されることもあるので、世代を問わず、馴染みのあるものでしょう。

太子の肖像画の最古のものは、8 世紀に描かれたとされる^{とうほんみえい}「唐本御影」です。

^{まほりよしたか}馬堀喜孝（1907～1999）が描いた旧一万円札の肖像画も、この「唐本御影」を元にして描かれたと考えられています。

展示の「帝国小史 乙号」（明治 25 年）にある太子の肖像画は、教科書に載せられた太子の肖像画としては、管見の限り、最も古いものです。描いたのは、日本画家の^{かわさき ちとら}川崎千虎（1837～1902）で、川崎は、文部省や大蔵省に出仕した官僚で、^{はくぶつかん ごようがかり}博物館御用掛も務めました。彼の経歴と、法隆寺の「唐本御影」が、明治 11 年（1878）に皇室に献上されたという史実から、川崎が「唐本御影」を閲覧できた可能性は十分にあるといえるでしょう。

この肖像画が、人びとに親しまれ、やがて旧札にまでなることをふまえると、「帝国小史 乙号」の肖像画は、重要な挿絵といえるのではないのでしょうか。

国語教科書の中の藤原道長

^{ふじわらみちなが}藤原道長（966～1027）といえ、^{げんじものがたり}「源氏物語」の主人公・^{ひかるげんじ}光源氏のモ

デルとなった人物として知られ、平安時代中期を代表する人物です。しかし、かつて検証がなされたように、歴史教科書においては、道長の事績に対する評価は良くありません。特に、皇室への強引な外戚政策^{がいせき}などから、批判的な記述が多く目立ちます。

そのことは、国語教科書における「栄花物語」^{えい が ものがたり}の抜粋部分からも明らかです。明治後期から大正・昭和前期の国語教科書には、「栄花物語」の中の法成寺造営部分が引用されます。なぜこの法成寺造営が取り上げられるかといえ、宮中や役所から材木や礎石を強奪した行為が「専横非道」^{せんおう ひ どう}と批判されており、道長という人物を批判するに最も有効な史実であるからです。

しかし、国語教科書には明確な批判の記述はなく、その教授方法は、各教師に委ねられていました。また、引用された「栄花物語」の末尾に、道長が聖徳太子の生まれ変わりという部分が残されたことは、太子尊重の高まりの中で、法成寺造営自体が、仏事という観点から、その行為が評価されていたことを示しているのかもしれませんが。

国語・歴史教科書の中の頼朝・鎌倉

現在、メディアで取り上げられている源氏そして鎌倉については、学制公布以後の国語・歴史教科書の中でも、必ずといっていいほど、その記述を見ることができます。

^{みなものよりとも}源 頼朝（1147～1199）については、平家を打倒し、鎌倉を中心に国を治めた点については高く評価されています。しかし、その猜疑心^{さいぎしん}から範頼^{のりより}・義経^{よしつね}

といった兄弟たちを処罰したことは、倫理的側面から批判の対象となりました。また、源氏が三代で途絶えたことも、その批判の正当性を助長する史実として受け止められています。

頼朝の評価を低くする理由の一つに、「判官はんがんびいき」という言葉の通り、義経人気があります。近年の研究では、安徳天皇あんとくてんのうを入水じゅすいに追い込んだこと、三種の神器の紛失、頼朝を介さない任官など、義経の失策・倫理上の問題を指摘する学説も出てきました。しかしながら、当時の教科書では、芸術面での義経人気、そのまま頼朝への評価に結びついていたのです。

国語教育の中の曾我物語

「曾我物語そがものがたり」は、鎌倉中期以後に成立したとされ、「吾妻鏡あづまかがみ」の記述を元にした復讐劇ふくしゅうです。その内容は、富士野ふじのの巻狩まきがりの際に起きた、曾我兄弟による、父の仇敵きゅうてき・工藤祐経くどうすけつねを討ったもので、物語として広く伝わった後、能や浮世絵など芸術の分野で多く取り上げられました。

曾我物語は、学制公布以後の国語教科書にも引用されました。その理由の一つに、女性視点からの語り口、母親目線の語り口が、女子教育に有効と考えられていたことがあります。また、「復讐」という行為が、国を守るために必要不可欠な精神であると位置づけられていたとも考えられています。

しかしながら戦後の教科書には、その記述は一切見えなくなりました。「復讐」という単語は、敗戦直後の日本には相応ふさわしくなかったからでしょう。

令和4年（2022）9月17日印刷・発行
編集 公益財団法人 日本習字教育財団 観峰館
所在地 〒529-1421 滋賀県東近江市五個荘竜田町 136
TEL 0748-48-4141 FAX 0748-48-5475
<https://www.kampokan.com>